

演題一覧

カテゴリー A 全般的なケア

食べる喜びをいつまでも 経管栄養から経口摂取へ

山口県 介護老人保健施設 寿光園

介護福祉士 久岡 佐知子

食べることは生きる楽しみの1つであるが、病気や年齢を重ねたことにより、「口から食べたい」という本人の願い叶わず、経管栄養となるケースも少なくないのが現状である。

今回経鼻経管栄養で入所された利用者に「口から食べる」という楽しみや喜びをもう1度味わって頂きたいという思いから、KTバランスチャートを用いてアセスメント、アプローチを行った結果1日3食経口摂取が可能となった事例を報告する。

高齢者体験(片麻痺編) 利用者の感覚を体感する活動を継続中

山口県 介護老人保健施設 青海荘

介護福祉士 中芝 雅恵

当施設では、目標管理活動の一環として平成30年度に「介護体験チーム」を発足させ、ケアを受ける利用者の感覚を体感し、それに敏感であるために様々な活動を実施してきた。今回は昨年度実施した、高齢者体験(片麻痺編)について報告する。

この取組みは、ケアを提供する私達の思いや技術と、ケアを受ける側の利用者の感覚にギャップが生じていないかを検証し、気づき、改善していくためのものである。今後も質の高いケアサービスを提供するため、活動を継続していきたい。

Let's experience! 高齢者模擬体験から学び得たこと

山口県 介護療養型老人保健施設 青海荘式番館

准看護師 池田 真理

当施設利用者の平均介護度は4.4で、医療度が高いことが特徴として挙げられ、食事支援や日常生活において、ほぼ全介助を必要とする状況です。

そのため、体位変換時や更衣時の皮膚剥離や、不穩時に行う、車椅子での長時間の見守りが問題となっていました。そこで、利用者の立場に立った看護、介護を行うにはどうしたらいいかを考え、学ぶため、高齢者模擬体験を行ったので、その結果について報告します。

眠りSCANで『利用者』『家族』『職員』を笑顔に！！ 眠りSCANの機能を有効活用した実践事例

山口県 医療法人水の木会 介護老人保健施設 豊松苑

介護福祉士 村上 靖

当施設ではサービスの質の向上を目的に、見守り支援システムの眠りSCANを導入しました。運用方法は事故予防のための離床センサーとしての使用が大半を占めていました。そこで単なる離床センサー扱いでは無く、「睡眠の質の向上」「身体変調の早期発見」「排せつ支援」に活用できるように取り組みを行ったので報告します。

カテゴリー D 排泄ケア

在宅復帰・排泄動作向上は排泄支援の早期介入 多職種連携が鍵となる

山口県 徳山中央病院附属 介護老人保健施設

看護師 室永 由紀恵

在宅復帰に向けた排泄支援は、家族の受け入れに大きく影響があり、安心して在宅に帰って頂くために、多種職と早期から連携しケアを展開して行く事が大切となる。今回、在宅に帰れたケースを取り上げ、問題となる事項やそれに付随する事が明確になったので発表する。

カテゴリー E 食事(栄養)・口腔ケア

栄養管理の質を高める取り組み

～他職種連携の強化～

岡山県 医療法人福嶋医院 介護老人保健施設 いるかの家リハビリテーションセンター 管理栄養士 三宅 麻絵

R3年度介護報酬改定では、施設の基本報酬に栄養管理が包括化されると同時に栄養マネジメント強化加算や通所系サービスにおける栄養アセスメント加算が新設され他職種連携での栄養アセスメントの取り組みが求められるようになった。

当施設栄養部では①業務の効率化②スキルの向上③他職種連携の強化を行ない、栄養管理の質の向上について考え取り組んだ。中でも、③他職種連携の強化のため、栄養管理業務をリハビリテーション部の事務所で行うことを試みたので報告する。

通所リハビリテーション利用者のサルコペニアの実態について

山口県 医療法人社団 青寿会 青海荘

理学療法士 市野 敏亮

通所リハビリテーション利用者のサルコペニアの実態調査を行った。結果、サルコペニアの有病率は100%であった。また、サルコペニアの重症度別による身体指標の比較では上肢や下肢の筋力指標に相関関係が認められた。サルコペニア有病者に対しては、運動と栄養による視点からの適切な介入の必要性が確認できた。従来の介護予防における自立支援・重度化防止の視点に加えて、サルコペニアを改善・予防するための取り組みのあわせてすすめていきたい。

もう一度口から食べる喜びを

多職種協働による支援だからできること

岡山県 老人保健施設 倉敷藤戸荘

管理栄養士 田中 綾

当施設では、言語聴覚士との連携により、令和4年7月から経口維持加算を算定している。対象者の1人であるF氏は、入所時普通食を食べていたが誤嚥により絶食となる。

その後ST介入の下、食事を再開するも恐怖心から経口摂取が進まなかった。在宅復帰するためには経口からの食事摂取が必須である。コロナの影響で家族からの支援も受けられない中、多職種の介入によってF氏の気持ちと食事形態の変化について報告する。

入所者の口腔内状況の把握と改善

多職種協働により「高齢者が楽しく食べる」を支援する。

山口県 医療法人 扶老会 老健ふなき

管理栄養士 櫻庭 育世

誤嚥性肺炎の防止や口腔機能に応じた食事介助など、“食べられる支援”をするうえで不可欠となる口腔ケア。高齢者に口から食べてもらうことによって、生きる幸せを実感してもらうために、管理栄養士は口腔ケアにどのように関わっていくべきなのか、また多職種が協働することで取り組んだ新しい対策を報告します。

カテゴリー F リスクマネジメント

新型コロナウイルス感染症の発生に対する施設の取り組み

山口県 小野田赤十字老人保健施設 あんじゅ

介護福祉士 田坂 麻子

この度、入所者に新型コロナウイルス感染症が発生し、施設内でゾーニングを行うこととなった。病院が併設していることの強みと日頃の感染対策の取り組みへの意識の改善が必要な場面があった。当初の感染者と接触歴のある入所者の対応は、速やかにできたが、他の部屋からの陽性者に対しては、正常化の偏見や陽性者との接触入所者の陰性が初日に確認できたことで、すぐに終息すると考えた。感染症発生による非日常を体験して、物品の不足や1ケア1手袋の徹底不足、日頃の防護具の着脱訓練の大切さ、感染に対するBCPの作成と訓練、部署を超えての職員間の交流などが必要性を痛感した。

老人保健施設くがにおける転倒・転落事故の現状と課題

転倒・転落事故のリスク分析と予防策について

山口県 高森福祉会 老人保健施設 くが

理学療法士 三輪 凌太

当施設の事故の多くは転倒事故である。転倒事故は、その後の日常生活動作にも支障をきたすため、可能な限り未然に防いでいく必要がある。当施設では転倒事故を外的要因・内的要因・行動的要因の3要因で分析し、それぞれの要因での問題点の抽出及び改善策を検討した。改善策の1つとして、転倒・転落アセスメントシート及び日常生活動作連絡票を活用することとし、多職種間で情報共有を図った。このような取り組みの結果、転倒・転落事故件数は徐々に減少している。今後の課題として、現在行っている評価だけでは日常生活場面のバランス能力の評価が不十分と判断し、今後は足底圧センサーを用いた精密な評価も行っていくこととした。

カテゴリー G リハビリテーション

多職種が連携し、在宅復帰を可能にした症例

山口県 介護老人保健施設 なんわ荘

作業療法士 我嶋 晋太郎

老人保健施設では、在宅復帰に向け多職種が連携する必要があるとされている。この度、これまでに転倒を繰り返し、既往歴に多数の骨折がある症例を経験した。入所当初は、動作が性急で転倒の危険性があった。また、今後の生活への不安も聞かれていた。入所初期にカンファレンスを実施し、目標や情報の共有を行った。目標や情報の共有は、各職種の本人との関わりに影響し、転倒予防、交流の場への参加、適切な住環境の調整ができた。退所後は、転倒は無く、歩行状態は改善し、家庭で役割を持った生活ができています。症例を通し、各職種間の連携の重要性を確認できた。

家に帰ってめざしが食べたいんだ。

一年間のベッド上生活から自宅復帰に至るまで

山口県 介護老人保健施設 みどり荘

理学療法士 山藤 千夏

現在コロナ禍において閉じこもり生活による健康被害が危惧されている。病院や施設においても同様に他者交流が減り、家族との面会も自由に出来ない状態が続いている。そこで今回は、一年間のベッド生活で意欲が減退していたが、そこから脱却し自宅復帰を目指して奮起した一症例を報告する。閉じこもりの要因には環境要因の他に、骨折などの身体的要因、活動意欲の減退などの心理的要因、それぞれが相互に影響している。それに対して、多職種が連携し多方面からサポートしたこと、小さな成功体験の積み重ねが自信につながり、やる気が向上したこと、自ら考えやろうと思う意志が継続につながったことなど、心理的、身体的変化を考察する。

認知作業療法を用いたデイケア修了へのアプローチ

山口県 介護老人保健施設 サンライズ21

作業療法士 安田 貴士

今回、両膝OAによる慢性疼痛があり、痛みからリハビリをして貰わないと歩けない、生活できないという、反芻思考(ネガティブ思考)になりその解決策として定期的なリハビリ(マッサージ)を望んでいた症例に対し、認知作業療法を用い、自動思考が変化しデイケアを修了するに至った。デイケア修了の問題点として、「本人・家族がデイケアを楽しみにしている」ということもあるが、「修了後の身体機能やADL低下を心配している」「本人・家族が状態改善・目標達成したと理解していない」という問題点もある。それらに対しては自己解決能力を育み行動変容につなげる認知作業療法の活用も有用ではと思う。

行動変容を促した症例のその後

認知行動療法の活用

山口県 介護老人保健施設 サンライズ21

理学療法士 中尾 拓夢

今回担当した症例で生活行為向上リハビリテーションに認知行動療法を取り入れて実施し、認知の歪みを修正し、行動変容が起こり、畑仕事を再開する事が出来た。その後、デイケアを卒業し、それから4年間、畑仕事を継続して行う事が出来ていた。畑仕事が継続出来ていた要因としてエンパワメントの構築に繋がった点や生きがい感の向上を図れた点の2つが挙げられた。このことから症例に対して、生活行為向上リハビリテーションの中に認知行動療法を取り入れた事は有用であったと考え、今後も実践していきたい。

在宅復帰率に寄与した退所者特性から見えた課題と対策についての検討

山口県 医療法人社団 青寿会 老人保健施設 青海荘

理学療法士 小野 勝弘

令和2年4月から令和4年3月までに在宅復帰した退所者特性と在宅復帰率に寄与した要因について後方視的に分析した。結果、個別リハビリ介入量が多い程、FIM利得も高く、重回帰分析の結果からも影響がある事が明らかとなった。しかし、信頼性が希薄である事や筋力指標である握力に個別リハビリ介入量が影響を及ぼしていなかった事から、専門職の質と量が課題であると考え。加えて専門職のみならず多職種協働による介入が、更に身体機能の回復を得るためには重要な因子であると考え。また、加齢に伴う身体機能の低下が示されたことから、長期入所は避けるべき要因であり、長期入所となる場合は身体機能低下予防に関係する対策が必要である。

当通所リハにおけるリハビリテーション会議の実態調査について

山口県 医療法人社団 青寿会 青海荘¹⁾ 武久病院²⁾

作業療法士 杉原 啓介¹⁾

対象は当通所リハでFAI内容と目標が一致してリハ会議を実施した利用者4名で、向上した2名を有効群、維持した2名を無効群とし、職員5名にその要因について自由記載で調査した。

結果、有効群のFAIは目標以上に向上を認め、目標達成のためはリハ会議でPDCAサイクルを強化する重要性を示した。無効群の課題として家族の心配から達成に至らなかった要因が挙がり、家族の不安に対するアプローチが重要であった。

カテゴリー H 業務改善と効率化

ぺあれんと通所リハビリにおける新体制作りの取り組み

～①通所リハビリのサービスの総点検～

山口県 介護老人保健施設 ペあれんと 通所リハビリテーションセンター 作業療法士 宮内 順子

ぺあれんと通所リハビリ(以下ぺあれんと通所)では、2019年4月より、地域オンリーワンの生活期リハビリテーションセンターを目指し、様々な取り組みを開始した。その中でも、ぺあれんと通所リハのサービスを24項目に分け、全ての総点検を行うことで、施設の魅力をブランディング化し、ぺあれんと通所リハの再生に取り組んできたので、その取り組みを発表する。

ぺあれんと通所リハビリにおける新体制作りの取り組み

～②朝夕の集い～

山口県 介護老人保健施設 ペあれんと 通所リハビリテーションセンター 介護福祉士 野村 清美

ぺあれんと通所リハビリでは、ブランディングを明確にし、地域でオンリーワンの選ばれる施設となるために、通所のケアを24項目に分け、ケアの内容などの見直しを行っている。

今回、自立支援・利用者さまの輝く場の提供と、利用者さま間の和の促進を目的に、朝・夕の集いの運営の見直しを行ったので発表する。

通所リハビリテーション利用者の急変時の対応

～職員の役割を見直して～

山口県 介護老人保健施設 青海荘 通所リハビリ 介護福祉士 山根 麻知子

当事業所は利用者が自立した在宅生活を継続するために多職種が協同し、リハビリの実施や入浴、レクリエーションなどの支援をしている。しかし、サービス提供中に急変する事例が年に約1、2件発生する実状から利用者の安全・安心のため、当事業所職員が急変にあたって、自分の役割を自覚し行動できるような取り組みを行ったため報告する。

カテゴリー J その他

外国人技能実習生を迎え入れて

山口県 介護老人保健施設 桜の園

介護福祉士 黒川 茜

私どもの施設では技能実習生を迎えることは初めての事であった。

令和3年1月初旬に入国し、愛媛県新居浜市にて日本語の研修や介護講習を受講したインドネシア人技能実習生2名を、令和3年2月22日から受け入れることとなった。

今回は、受け入れ前から行った準備と、受け入れ開始から一年半経った現在までの様子について報告します。

新型コロナウイルスの影響による稼働率低下について 青海荘存続の危機!?稼働率UP大作戦

山口県 介護老人保健施設 青海荘

支援相談員 古賀 良裕

令和2年冬から全国的に広がり始めた新型コロナウイルスは、令和4年3月に当施設でも発生し、クラスターとなりました。クラスター発生からの稼働率の低下は著しく、稼働の低迷が続けばさまざまところで悪影響を及ぼします。新型コロナウイルス発生の状況と、クラスターによる影響、また、低下した稼働率を回復させるために取り組んだ事例と、その取り組みに対する結果をご報告いたします。

コロナ禍における面会の現状と課題 コロナ禍での面会方法についての調査報告

山口県 医療法人 扶老会 老健ふなき

作業療法士 立花 祐介

新型コロナウイルスの感染拡大による社会生活への影響は拡大してきており、特に、医療・福祉のぶんやに対する影響は深刻である。介護老人保健施設においても、利用者様がご家族と直接面会できないなどの形で影響を受けてきた。しかし、リハビリや在宅復帰という観点からみても施設での面談は重要でとなる。ガラス越し面会やオンライン面会など、コロナ禍での面談は大きく変化している。その中でご家族はそれをどのように感じ、どのような影響を受けているかの調査を立案・実施して考察を加えたので以下に報告する。